

シングル化か，家族形成の多様化か

宮本みち子

東京 23 区は全国のシングル化（一人暮らし化）の先陣を切っている。この地域は以前から一人暮らしが多かったが、シングル化は高いレベルでより一層進んでいる。なかでも、区部が人口増加に転じた 1995 年以後、30 代後半から 40 代の壮年前期シングルの増加・集中傾向が顕著で、とくに女性の割合が大きく増加している。将来は、壮年シングルがそのまま高齢シングルになっていくだろうと予想される。筆者等は特別区長会調査研究機構で、近年増加傾向を示している壮年期（35 歳～64 歳）に着目してその実態を研究してきた（「特別区における小地域人口・世帯分布及び壮年単身者の現状と課題」令和元年度、2 年度調査研究報告書）。壮年シングルの特徴の一端を紹介したい。

女性は、一人暮らしにともなう諸々の不安を男性以上に感じやすい分、親やきょうだいと頻繁に連絡をとっている。それに加えて、趣味やレジャーの活動で会う人や友人との関係が男性より明らかに多い。女性の所得水準は男性より低いにもかかわらず、くらしに「満足」と感じている人が、男性を上回っている。東京の自由な空気と働いて自活できる環境は、女性にとって大きな魅力となっているのである。一方、男性は職場中心の毎日で、多様な人間関係を築くことに関心が薄い。既婚男性と同じように、性役割分業を前提とした男性のライフスタイルを転換できず、パートナーを得て結婚するまでのモラトリアムのまま壮年期が過ぎていく状態にある。その証拠に、「一人暮らしを続けたい」という意向は男女による差が大きい。シングル女性は 40 歳代前半まで「わからない」が多いが、その時期を過ぎると一人暮らしを続ける意識が固まっていく。ところが、シングル男性は 50 歳代まで「わからない」が多く、

一人暮らしを受け入れるような気配はみえない。他方で、年収 500 万円未満の男性の 4～5 割は「収入の不安」を結婚していない理由のひとつにあげているが、女性にはそのような傾向は見られない。男性にとっては「稼ぎ手」であることが男らしさの規範であり続け、所得が高くなければ結婚できないとの思い込みが強い。しかも、諸支援の不在が結婚を阻んでいる。

ここから言えることはつぎの 4 点である。第 1 点は、結婚にまつわる因習とキャリア形成の困難がある限り、女性は東京に移動しシングル化しやすいことである。第 2 点は、東京区部においても、結婚の柔軟化・多様化はそれほど進んでいない。親やきょうだいを中心とする親密圏の比重が高いために、家族に代わる多様な共同生活体は発達しにくい。シングル化の進行を押しとどめるには、同棲、事実婚、ステップファミリー、同性カップル等の柔軟な家族の関係が社会的に承認され、親密圏を形成しやすくなることが必要ではないか。第 3 点は、ジェンダーによらず困った時に頼るのは親・きょうだいで、友人・知人に頼る比率を上回る。特に男性にあっては、介護が必要になったら、いきなりケアマネジャーやヘルパーなどの行政の専門家をあてにしているのは、日ごろから頼ることのできる家族の関係や友人知人関係を作っていない結果だろう。高齢非婚シングル急増時代をにらんで、男のライフスタイルを転換し、社会関係づくりを生存戦略として進める必要がある。第 4 点は、シングルの暮らしは公助と商業市場だけでは支えられない。各種の非営利・ボランティアな活動で成り立つ中間圏を広げ、そこに参加していくことが必要である。

（みやもと・みちこ 放送大学／千葉大学名誉教授）